

現代に生きる中・高校生のための日本漢詩・日本漢文の教材化(1)

朝倉 孝之 岡本 恵子 富永 一登 佐藤 利行

0. はじめに

2004年12月に発表されたPISAの報告書はこの国の国語教育関係者のみならず、多くの人たちに衝撃を与えた。それは今回の調査(2003年)により、この国の15歳の読解力が前回調査(2000年8位)より大幅に低下し、OECD加盟国中位の14位であったことが明らかになったからである。PISAのいう読解力の内容については、詳細な検討を要する部分もあるが、それを置いても「読解力の低下」という発表のインパクトは大であった。しかし、数学的リテラシーと科学的リテラシーが前回同様1位グループであることを考えると、問題は低下ではなく、読解力そのものであるとも考えられる。このような現在の国語教育をとりまく状況の中で、漢文教育はどうあるべきなのか。

漢字・漢語・漢文はこの国の言語生活に不可欠なものであり、国語学習にとっても不可欠なものである。当然「読解力」においてもそれらは要求される。かつてこの国の先人たちが読み解いた対象はそれらであり、表出したのも漢字・漢語を用いてであった。そのような日本漢文は外来文化の受容であると同時に日本の感性の創造でもあった。近代以降西洋化の中で忘れ去られようとしてはいるが、日本語が漢字表記される限り、漢字・漢語・漢文は文化を支えるバックボーンである。故にそれを用いて日本人が何を思索し、表現したのかを学習することは意味がある。

この研究は、三年をかけて過去の日本漢詩・日本漢文教材を見直すとともに旧来の枠を超えた作品を発掘し、教材研究を行い、授業実践を通して新しい時代にふさわしい教材の確立を目指すものである。一年目である本年は、これまで漢文および日本漢詩・日本漢文が戦後の歴史の中でどのように学習されてきたのかを、学習指導要領と教科書指導書をたどることによって明らかにする。

1. 学習指導要領の変遷と戦後漢文学習の出発点

はじめて学習指導要領が出されたのは、1947年で、

それは試案であった。漢文学習に関する言及がなされるのは、1951年の高等学校学習指導要領国語科編(試案)であるが、学習指導要領の変遷を概観する上で、最初の学習指導要領の理念は重要である。殊に、「なぜこの書はつくられたのか」に記された「この書は、学習の指導について述べるのが目的であるが、これまでの教師用書のように、一つの動かすことのできない道をきめて、それを示そうとするような目的でつくられたものではない。新しく児童の要求と社会の要求とに応じて生まれた教科課程をどんなふうにか生かしていくかを教師自身が自分で研究していく手びきとして書かれたものである」は、一つの価値を子どもたちと教師に押しつけることはないと宣言し、共に新しい教育を築きあげていこうとする意志と情熱を示している。このような思いをもって学習指導要領は誕生したが、後に「法的拘束力」をもつと解釈される存在に変質していく。現行の学習指導要領は第六次改訂にあたる。その変遷を簡潔に記す。

- 1947年
 - ・「学習指導要領一般編(試案)」「各教科編(試案)」
 - ・戦時下の軍国主義的超国家主義的な教育思潮の払拭。修身科の廃止。
 - ・児童中心主義・経験主義・デューイ
- 1958年
 - ・第二次改訂
 - ・「道徳の時間」特設。
 - ・経験主義批判。
 - ・「法的拘束力」をもつ。
- 1968年
 - ・第三次改訂
 - ・「教育課程の現代化」
 - ・「学問中心カリキュラム」
 - ・ブルーナー
- 1877年
 - ・第4次改訂
 - ・「教育課程の現代化」批判。
 - ・「ゆとりと充実」標準授業数1割削減
 - ・「人間中心カリキュラム」

- 1989年
 - ・第5次改訂
 - ・「人間中心カリキュラム」批判
 - ・生活科
 - ・「生き方」(中学校)
 - ・「在り方生き方」(高校)
- 1998年
 - ・第6次改訂
 - ・「ゆとりの中で生きる力をはぐくむ」
 - ・「総合的な学習の時間」
 - ・教育内容の精選と3割削減。
 - ・「情報」科

このように、学習指導要領は敏感に時代を反映しながら、何かを手探りで懸命に求めているかのようである。

試案の時代の理想主義的な熱意が牧歌的に思えるほど時代が下るにつれて神経質になっていくようである。

次に、戦後漢文学習の濫觴となった試案の時代に焦点を当てて述べることにする。

【試案の時代・1951年】

戦後の漢文教育は戦前の反省に立って、漢文が日本の古典であることを強調しており、漢文の学習のために一章を設けている。その内容は以下の通りである。

第七章 国語科における漢文の学習指導
一 漢文学習の範囲
二 漢文学習の意義
三 漢文学習指導の目標
四 漢文学習指導の内容
五 漢文学習指導の段階
六 漢文学習指導上の注意

ここで漢文は日本の古典として国語科の中で学ばなければならないと「一 漢文学習の範囲」で明示された。そしてここに漢文とよぶものは、

- (一) 漢民族によって作られた文語体の詩文。
 - (二) それを学んで日本人が作った詩文。
- のことであり、広い意味では、
- (三) 日本語を混じた漢字のみの文。
- と定義されている。

さらに、漢文学習のおもな対象は、前に述べたような国語となった漢文であるが、そうした漢文的なものの学習は、さらに広い範囲にわたる。元来、漢文はわれわれの言語生活を豊かに育ててきた重要な要素であるから、今日の国語の中にも、文字・語い・文法・文体などに多くの漢文的要素が生きており、これを無視

しては国語学習は完全には成り立つまい。この漢文的なものの学習は、漢文学習の重要な手がかりとなるとともに、国語学習の効果を増すことになることと記している。

ここでは漢文は漢民族によって作られた文語体の詩文だけを指すのではなくて、日本人が作った詩文を射程にいられており、「漢文的なものの学習」が国語学習にとって不可欠であることをかなりの字数を費やして述べている。

漢文的なものの学習の内容には、次のようなものがある。

- (一) 漢字・漢語。
- (二) 漢文の書き下し文。
- (三) 漢文を国語に訳した文。
- (四) 漢文訓読の影響を受けてできた、いわゆる漢文口調の文。
- (五) その他、漢文学習の助けとなる各種の資料。

何より注目すべきは、わざわざ「六 漢文学習指導上の注意」として項目を起こしていることである。それは「漢文学習は決して古い東洋道徳を教えるためのものではない」とことわることから書き始められており、戦前の漢文教育の目標がいかなるところにあったのか、窺わせるものとなっている。

そして、「漢文学習は、その資料を現代的な観点から批判せずには扱ったり、また、漢文を作るための細かい同訓異義の説明をしたりしてはならない」と社会が要求する漢文学習や戦前の漢文学習に対する批判を十分意識したものとなっている。学習方法についても「今まで一定の形式ばかりにとらわれていたが、第二章や第四章を参考にして、いろいろにくふうされなければならない」と旧来の授業法を否定し、新しい漢文の授業法・学習方法を喚起するものとなっている。

ここには、戦前の漢文教育が果たしてきた役割への痛烈な反省とそれを乗り越えようとする意志が読みとれる。では、今回は日本漢詩に焦点をあてて具体的にはどのような作品が教材として扱われ、学習されてきたのか教科書所収の日本漢詩のリストを教科書指導書をひもときながら以下考察する。

2. 指導書に見る日本漢詩指導の変遷

附属高校にはかつて使用された教科書とその指導書が残されている。その数は決して多くはないが年次を追うことは可能である。また教科書出版社の協力も得て、幾冊かの指導書を手入することができた。ここではその指導書から日本漢詩がどのような意図で採択さ

れ指導されてきたのか、その歴史を見ることにする。

【試案の時代・1951年】

1951年学習指導要領試案で述べられた漢文学習のおもな意義としては、

- 1 漢文は古くから、わが国語で読まれ、そのおもなものは、わが国の重要な古典となっている。
- 2 わが国は古くから漢文や漢文調の文章を書きことばとして用いてきた。そうしてそれらの中には、わが国の重要な古典となっているものもある。
- 3 国語は、文字・音韻・語い・文法・文体などのあらゆる面で、漢文と深い内面的な連関を持っており、新しいことばが作られるときなどにも、漢字・漢語を用いることが多い。したがって、国語の知識・理解・技術・能力・鑑賞・理想を高め、また国語の発達を図ろうとする態度を作るためにも、漢文の学習は必要である。

が挙げられ、それをふまえて漢文学習の目標として示されたのが以下の点である。

- 1 漢字・漢語の構造や発音や意味を理解し、かつこれを正しく効果的に用いる技術と能力とを高める。
- 2 漢文体・漢文口調の言語・文章の特質を理解し、それを国語の効果的な使用に役立てる。
- 3 漢文の文章の構造を理解し、これを読みこなす能力を伸ばす。
- 4 わが国の文学と漢文との関係を理解し、広く文学の鑑賞に資する。
- 5 わが国の古典としての漢文をよく理解して、われわれの生活を豊かにする。
- 6 日本文化・東洋文化に貢献した漢文の意義を理解する。

前提となっているのは漢文が生徒の日常生活と深く結びついているという認識である。会話や書物のみならず、掛物、額、石碑や墓碑、習字や郷土研究等具体的に挙げて、漢詩・漢文に触れる機会が多いのだから、漢語・漢文の特質を理解させ、漢和字書の引き方を学習させて、国語学習の効果を増すようにという点に、終戦後新たな国語学習の出発に当たっても漢文学習が不可欠であると考えた根拠が伺える。

また、漢字の造語力への期待も大きい。戦後の復興と技術革新に当たって、かつて明治時代にそうであったように、新しい漢語の誕生が必要と判断したものであろう。現在のようなカタカナ語の氾濫など予測だにしていなかったのであろう。

この時代の日本漢詩の扱いは実に多様である。試案が熱を込めて述べているように、新しい教育を模索した時代にあつて、人口に膾炙していたはずの日本漢詩

をどのように新しく生まれ変わらせるか、教材の見直し、指導方法の見直し、各社の指導書にはそれぞれ特色が見られる。

1953年『精選漢文読本 巻一』（開隆堂出版株式会社）

単元設定の理由として、上代より漢詩漢文は教養の柱であり、「われわれの祖先が切磋琢磨の功を積んでうたいあげた漢詩の中、比較的平易で而も品格の高い作品を十一首えらんで掲げ、先人の詩情をしのぶと共に、日本の漢詩に対する理解と鑑賞の能力を養う資とした」として、江戸時代後半の詩を挙げている。

学習目標は、「祖先の生んだ珠玉の作品」を「親愛の情を以て反復朗唱しながら静かに各篇の風韻を味わい、祖先の詩魂をしのび」中国の詩篇と「詩情という角度」から「共通点を興味深く理解させる」としている。

「詩の学習は、詠まれている状景や作者の心情を理解することによって、おのずからその詩一篇の詩情とリズムとをくみとらねばならぬ。その点、同じ国土と同じ歴史に生きた祖先の作品である日本の漢詩は、生徒に最も親しまれやすい筈である」とし、その学習の中心を反復朗誦におくが、朗吟の型にとらわれず自由な感動を大切にすることで自然に観賞の域にも入り、「詩の生命とリズム」もわかってくるという。

ここには学習者の自由な感動を大切にしようとする姿勢とともに、当時、日本文化になお詩吟の伝統が息づいていたことをみてとることができる。

開隆堂では10年後の1963年発行『漢文精選（古典）』においても同様の姿勢が見られ、作品数7首と、同時期他教科書に比較しても多く収められている。

「各自の感動のままに、自由に朗唱させてみるのがよい。それを適宜に指導してやれば、おのずから、詩の生命とリズムがわかってくるものである」また「漢詩が生きた詩であることを知り」「深い興味をいだかせるよう指導」しようとする立場に変化はない。さらに「既習の中国詩とくらべた感想を生のまま述べさせて、これを整理し、主として詩情に結びつけて両者の共通点を理解させる」とあり、この「共通点」に注目させようとするのは、他社の指導書が相違点を意識させ日本独自の特徴を捉えさせようとするのとは異なっている。

こうした姿勢は、先の試案の「指導上の注意」で述べられた「漢文学習は決して古い東洋道徳を教えるためのものではない」という考え方に沿ったものであつたらう。だが、他社の指導書はまた、違う立場に立つ。

1955年『新編高等漢文』明治書院

単元の目標は「漢文は古くから現代に至るまで、長く日本文化に少なからぬ影響を持っている。随って各時代の代表的作品を挙げ、私どもの祖先がどのように漢文を摂取してきたかを考えることによって、日本文化に対する深い認識をもつことが出来る」とし、3年間で段階的に「理解の易しいものから難しいものへの立場と、時代の親近感の立場、それを国語の授業面の関連からして、時代を現代から上代へ遡行する」ために、巻一は「明治時代と幕末の頃の詩文」を、巻二では「江戸時代の代表的作品」を、巻三では「上代の漢文」を取り上げている。

指導上の注意として、「単なる語句の解釈や鑑賞のみに終わることなく、日本漢文学史の上に立って、その作品の地位、価値などを指導してほしい」とある。

巻一には、学習活動として配当時間が示されており、「題壁」「桂林荘雑詠」「偶成」の3詩を1時間で扱うように示されている。この時間数では、十分な朗詠や自由な鑑賞は難しかろう。ただし、「桂林荘雑詠」に関して「人口に膾炙した作品」と記されているように、当時は生徒にとってもこれらが周知の作品であり、改めて朗唱や注釈は必要ないものとして扱われたのではなかろうか。

同じ明治書院、『改訂高等漢文』(1958年)になると、「民族の精神や趣味の没すべからざることを味わう」こと、「詩を朗読させて、作者の襟懐に触れしめ」ることが単元の目標に加わってくる。改めて朗読による鑑賞が見直されたものであろうか。

いずれにしても、明治書院では日本漢詩を日本文化との深い結びつきから取り上げようとしている。

次に挙げる三省堂では、さらに道徳的な側面を強く意識している。

1955年『新しい漢文 第三学年用』(三省堂出版株式会社)

まず、学習のねらいとして、「漢詩文の表現形式をかりて、縦横にこれを言い表しえたわが先人の才能に敬意を捧げたい」とある。

広瀬淡窓「桂林荘雑詠」では、「江戸時代における塾の教育及び塾生の生活、友情などを知らせよう」とあり、頼山陽「送母路上短歌」では、作者の「孝心を感じとらせ」また「山陽の人となり及びその詩に対する研究に興味を起こさせるとともに、作者の幕末維新時代の精神史にしめる位地をも知らしめよう」とある。その他、詩ではないが、柴野栗山「雛鶯説示塾生」文でも「塾生に好学心の大切なことを論し」励ましている「趣旨を十分に汲み取らせたい」とあると同様に、日本漢詩の学習において道徳的とも言える指導目標を

立てている。

1957年『新しい漢文 改訂版』(三省堂)

富士山や天草洋という日本的な題材や「白扇倒懸」などの日本的表現は中国の人々に正確には読み取ってもらえぬおそれもあるから、「日本的題材と日本的表現に留意し、中国的なそれと比較して、その特性を知ること」が、大切であるとしている。また、「日本人にとっては容易に理解されるはずの内容であり事実である」が、「漢文という表現形式を通して、いかに誤りなく読みとるか」が「指導上のねらいとなってくる」とする。

この二点はまさに先の1953年度版開隆堂で戒めていた点であり、明確な差違が見て取れる。

1953年『改訂高等漢文』大修館書店

高校生がなぜ漢文を学ぶ必要があるのか、それに答えるべく序説が書かれているが、そこには入門期の単元目標として次の2点が挙げられている。

まず「ことばと漢文」で、日常使用する文字言語について漢文的な見地から検討を加え、次に「祖先と漢文」で、祖先がいかに漢文を受容摂取して、その思想内容を自己の血肉としたかを著名な古典によってその影響の大きさを、掛け軸などによって「なお生活とともにあることを知らしめんとしたと」ある。

以上のように、この時代の各社の方向は同じではない。しかもどの指導書も情熱をこめて語っている。終戦後、示された試案に沿って、しかし各社なりに自由な立場で、漢文復活のために、それぞれに模索していた時期と言えるだろう。

【古典甲・乙の時代】

この時代は2期に分けられる。内容からは1963年実施の指導要領も1973年施行のものも大きな変更はない。

古典甲の目標に「古典としての古文や漢文について、概観的な理解を得させ、読解し鑑賞する能力を養い、思考力批判力を伸ばし、心情を豊かにする」とあり、古典乙でも「古典としての漢文」に同様の目標を立て、加えて「特にわが国の言語、文学、思想などとの関係の深い漢文の読解を通して、そこに盛られている文化の特質や意義がわかるようにする」とあり、古典乙IIはそれを「高め」ることを目指した。

この時期、教科書所収の日本漢詩がある程度絞られ、日本文学との関連から取り上げられることが多くなったのもこの姿勢に沿ったものであろう。

1960年『高等学校 新漢文一』三省堂

単元の意義とねらいについて「日本人の漢詩文についての知識を得させることを目標」としており、「漢文的素養は、日本文学と切り離せない重要性を持つことを理解させたい」そして「わが国文化を発展させた漢字・漢文の意義を知らしめるとともに、日本人の漢詩文に親しみを持たせるように指導せられたい」と求める。それは「国語の中における漢文といった意識は、これら日本の漢詩文の学習を通じてこそこれを具体的に強調しうるはずである」と考えるからである。これは従来の各社の指導書を統合したかのような印象を与える。

さらに、ここには、現行の学習指導案に近い形式のものが掲載されており、その中に「日本の詩は、親しまれやすいはずであるから、反復朗読させ自然に鑑賞にはいらせるよう指導する」とともに、各詩の主題を読み取ることを要求する。

印象的なのは「遊芳野」では「表現の特色を考える」、「桂林荘雑詠」では「江戸時代の塾生活の苦楽の実相と意気」を読み取り「現代の学生生活」と比較させ、「送母路上短歌」では「この詩から受ける感想を話し合う」と明示していることである。指導要領の目標を意識して上記の学習目標を掲げたのかも知れない。

1964年『高等学校古典 総合』角川書店

目標には「わが国名家の漢詩に触れて、心情を豊かにする」とある。従前見えなかった文言であるが、これも先の指導要領に即したものであろう。

これには簡単な学習指導案があり、構想された授業を浮かべることができる。

「主題の把握」として「詩の中心はどこか」と問いが示され、続いて「人生観の観察」として「それぞれの詩人と、その生きた時代との関係。またその職とした仕事との関係」を考察させ、発展課題として「祖先の漢詩文に対する努力をしのび、進んで本教材以外にも、山陽や明治の文人の詩を自ら調べる」よう求めている。もっとも、授業は「1 訓読、2 語彙、3 文法、4 内容把握」が中心であるが、このように展開が示されたのは、このあたりが嚆矢と言えるのかも知れない。惜しまれるのは配当時間が示されていないことである。

日本文学との関連をさらに鮮明にしたのは次である。

1967年『新高等漢文選』大修館書店

冒頭に編集要旨が述べられている。そこに「日本文化との関係を重視し、国語古典との関連を随所に計った」とあり、

イ 教材は、わが国の言語・文学・思想などと関係の深いものを特に選んだ。

ロ 本文に関係のある国語古典を参考に掲げ、相互の関連を明らかにするように努めた。

ハ 日本漢文の単元を設け、漢文と日本文化との関係を示した。

とあるのも、指導要領を体現しようとしたものであろう。

教科書の日本漢文の項を開くと「和漢朗詠集」から10首、朗誦に力点を置き、「平家物語」の一節を引いて、国文への影響を知らせようとしている。また漢詩6編、柴野邦彦「詠富士山」詩の後に「万葉集」より山部赤人の長歌反歌を並べている。

1967年『新制高等漢文〔乙Ⅱ〕改訂版』大修館書店
単元の目標として以下が挙げられている。

- ① 奈良朝から平安朝にかけての、日本人の漢詩漢文の作品の実例を知る。
- ② その時代の作品にふれることによって、日本人の漢詩漢文摂取のあとを知る。
- ③ 日本人に与えた漢詩漢文の影響を考え、調べてみる。
- ④ 日本と中国の文化交流のあとをたどって考え、調べてみよう。

「上代日本の漢詩文」として『懐風藻』や『文華秀麗集』等より10首と文1編が収められているが、配当時間は6時間である。

興味深いのは、各時間毎に指導目標、学習活動、指導上の留意点が、現在の指導案に近い形でしめされていることである。

たとえば、「在唐憶本郷」では、作者弁正の伝記からその「人がら」を知り、詩からそれを推察、さらに人物像を考え、「中国との文化交流にたずさわった人々の苦勞のあとを調べる」とともに「詩の表現技法を分析してみる」ことを目標としている。指導上の留意点も、従前に比較してかなり親切になり、「滑稽」「善談論」の語感や「勞」「苦」という詩語に着目するよう示してもいる。

「乙Ⅱ」という発展的な科目であることも関係しようが、作品そのものではなく、あくまで日本文学との関係で学習するのである。

ところが、明治書院の1966年『改訂漢文 古典乙Ⅰ』ではこの時期に至っても、従前とほぼ同様の目標が掲げられており、「詩の朗吟も時に心情を高揚して、印象を深からしめる有効な学習法である」としている。

ここでも多くの教科書に採られている「冬夜読書」「芳野」「桂林荘雑詠」等が収められているが、「この

単元の詩文は一般に平易であるから、題名・作者・出典などの説明のほかは、多く生徒の自学に待つてよい」として、七言絶句4首、古詩1首、排律1首に、「序」本文1編を合わせて3時間配当としている。現在では考えられない配当時間であろう。

先述したように、1970年の学習指導要領の改訂では大きな変化はない。「古典Ⅱ」における「古文、漢文の学習には、それぞれ1単位以上を充てること」と示され、「古文、漢文のそれぞれについて、一つまたはいくつかの作品を精選して取り上げるようにすること」と示された程度である。だが後掲の表からも分かるように、以後、日本漢詩の種類は急速に減少し、特定の詩へと絞られていく。実態としては大きな変革期であったと言えよう。

【国語Ⅰ・Ⅱの時代】

1982年から施行のこの改訂では、国語Ⅰ・Ⅱとなり、漢文への言及は「古典における古文と漢文との割合は、一方だけに偏らないようにすること」のみとなり、「古典」でも大差ない。そのためか、日本漢詩は教科書からほとんど姿を消し、日本文学との関連に限ってわずかに命脈を保った観がある。

1982年『高等学校 漢文』大修館書店

「白楽天と日本文学」と題して、菅原道真「不出門」が白居易「香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁」と並んで採られている。そこには「枕草子」299段と「大鏡」巻二が合わせて引かれている。あとは、白楽天の「長恨歌」と「源氏物語」、和漢朗詠集も白居易の作品の一節と、日本漢詩は一首である。

1987年『高等学校漢文選 改訂版』大修館書店

「日本の漢詩文」の「単元の目標」として、改めて「漢籍の伝来以後、我々の祖先たちは、漢文を国語として読み下す訓読という独特の方法を考え出すとともに、漢詩文こそ正式の書きことばとして、思想・文学・歴史等の多くの分野にわたって漢文を書き続けてきた。それらの中から、古人の人生や学問に対する真摯な態度や情熱を見いだしたい」と述べている。

しかし日本漢詩について見れば、「和漢朗詠集」のみで、独立した作品としての扱いはない。とはいえ、日本漢詩掲載自体が珍しいともいえるこの時期にあっては貴重な例と言えよう。

1989年改訂の指導要領でも大きな変更はなく、日本漢詩離れに一層拍車がかかり、ほとんどの教科書から姿を消すことになる。

わずかに、教育出版で、「国語Ⅰ 漢文編」では「題不識庵擊機山図」を、「国語Ⅱ 漢文編」では「將東遊題壁」を唐詩の後に「参考」として載せている。

また、三省堂「高等学校 国語Ⅱ」では、漢文教材との関連で日本漢詩を挙げている。

広瀬旭荘「馬図」については「今、韓愈の『雑説』を読み終えたばかりである。伯樂に巡り会えないばかりに、いたずらにその才能を埋もらせている。…では、この詩はどうだ。」と、また『史記』項羽本紀によって、項羽と劉邦の天下争奪の術策や、戦闘の場面を学習し終えた後、我が国の戦国時代のよきライバル二人の一面を『日本外史』から抜粋して学習する」とあり、さらに菅茶山「冬夜讀書」については「孔孟をはじめとする古代中国の思想を学び終えた。当時の思想家たちが遺した言葉を、現代人として読解した。では、我々の先人達は、これらの思想にどう向かい合ったのであろうか。菅茶山は自己の軌跡を漢詩に詠んだ。これを読み味わい、学問に対する姿勢とその心情とをさぐり、自己を磨く機会としたい」と述べている。

こうした扱いが精一杯だったのであろう。ほとんどの教科書では、日本漢詩の姿が消えてしまったのがこの時代である。

【現行学習指導要領】

「古典」の内容の取り扱いの中で、「教材には、日本漢文も含めるようにすること。また、必要に応じて近代以降の文語文や漢詩文などを用いることができる」という文言が加わったためであろうか、日本漢詩が再び採用されるようになった。教材の幅が広がったわけではなく、その扱いが変わったのである。

現行の明治書院「精選古典」では「日本の漢詩文 五編」として詩4編と散文1編を収めている。そのねらいとして、まず、菅原道真「読家書」では「対句を多用した表現力」に、上杉謙信「九月十三夜」では漢詩が一部漢学者のみのものではなかったことに、菅茶山「秋夜夢姪孫」ではその卓越した表現に、夏目漱石「題自画」では、鮮やかな景物描写に注目し、これらを学ぶことによって「かつての日本人が持っていた文化に触れ、その精神の軌跡を辿り、漢文や日本文学の豊かさを再認識させたい」とある。

さらに指導のねらいとして、次の3点を挙げている。

- ① 作者の視線の移ろいを確認し、心情を捉える。
- ② 日本文学における漢文の重要性を理解させる。
- ③ 「漢文」という文学形式が用いられている理由を考察し、漢文の特徴を再確認する。

同じく明治書院「新編古典」では「日本の漢詩文 四

編」として、頼山陽「題不識庵擊機山図」広瀬淡窓「桂林荘雜詠」を収め、次の目標を掲げている。

- ① 日本の漢詩文に読み慣れ親しむ。
- ② 日本の漢詩それぞれの主題を読み取り、それについて話し合わせる。(③は散文につき略)
- ④ 大きな声で朗唱させる。

第一学習社「古典 漢文編」

ここでは「日本の詩」として、菅原道真「不出門」菅茶山「冬夜讀書」正岡子規「送夏目漱石之伊予」をあげ、それぞれについて作者の心情を読み取らせることを学習目標として掲げるとともに、詩形の学習など、日本漢詩独自の目標を挙げているわけではない。ねらいの中で「中国人と中国語で会話できない日本人でも漢詩を作ることができたのは、漢詩、ことにその近体詩にはきわめて細かなきまりがあるからで、…すなわち中国語を知らなくても漢詩は読めるのであるから、生徒には積極的な学習を求めたい」と述べているように、歴史的な位置づけ等、日本漢詩と声高に価値を云々するのではなく、1編の作品として読もうとする姿勢がうかがえる。

必修の「国語総合」ではなく、「古典」での取り扱いということから、履修する生徒は限られることとなった。ましてやもう一つの必修科目である「国語表現」を履修する生徒が日本漢詩に触れる機会はほぼ無いといつてよからう。

日本漢詩一つとっても、試案の時代の熱気はすでに無く、またかつて生活の中にあつた詩吟や掛軸等からさえ日本漢詩の痕跡を迎えることができないように、生活が変わり、それに伴って国語教育の中身も大きく変わってきたことが実感できる。いたずらに旧に復する必要はない。しかし、日本語の骨格が変わらないのであれば、日本漢詩・漢文をこのまま過去に埋没させてしかねない現状を放置してよいだろうか。

3. 採択教材から見た日本漢詩

次頁に掲げるのは、教科書に採られた日本漢詩教材の一覧である。ただし、出版された全ての教科書に当たったわけではないし、その扱い方にも差はある。それでも、戦後どのような詩が教材化されたか、変遷を見ることはできよう。また、教科書が指導要領と不可分の関係にあることは言を待たない。したがって、基本的には指導要領施行に沿って時期を分けた。

まず明らかなのは、その詩の種類である。試案の時代はまさに多種多様な詩が取り上げられている。多くは詩吟や講談など庶民文化の中で人口に膾炙したものが、

まだ生活の中に根付いていたのではなかったか。

古典甲乙の時代にも、詩の種類はやはり多い。ただ、どちらかと言えば新井白石や菅原道真のように歴史的に有名な人物の作品が多くなっているように思う。また、たとえば、森鷗外が姿を消して、夏目漱石が増えているのも興味深い。

同じ古典甲乙の時代にあつて、1973年からはその種類が急減する。ほとんどの教科書に扱われてはいても、同一の詩が採られて、結果として詩が限定されていくのである。

それが国語ⅠⅡの時代になると一層拍車がかかり、今度はほとんどの教科書から姿を消していく。時代の要請にそれまでの日本漢詩では応えることができなかったのだろうか。わずかに他の教材との連関から命脈を保っているにすぎない。

その中で、菅原道真「不出門」広瀬淡窓「桂林荘雜詠」頼山陽「泊天草洋」は絶えず採られてきた。「不出門」は作者の不遇とその心情、「桂林荘雜詠」はかつての学生たちの暮らしとそれへの思い、「泊天草洋」はその雄大な自然詠が多くの場合のねらいであった。

現行の教科書でもこれらは残っており、菅茶山「冬夜讀書」がこれに続く。

目を引くのは正岡子規「送夏目漱石之伊予」で、これは歴史が非常に浅い。現代の子どもたちになじみの作者、また夏目漱石という名前も大きな理由であろう。

表からは、どの時代においても、教材を学習者にできるだけ近づけたいとの採択意図が伺える。

かつて見られた位置づけは、以下のようであった。

- 1) 日本人の伝統的な価値観、感受性に触れる。
- 2) 中国文化の日本文化に及ぼした影響を知る。
- 3) 伝統的生活を背景とした文化を継承する。
- 4) 日本の風土に根ざした日本漢詩の特性を知る。
- 5) 歴史的人物の生き方、考え方に触れる。
- 6) 古文、漢文との関わりから、日本古典文学の理解を深める。
- 7) 日本の風土や考え方に即して生み出されてきた和製漢語や、漢語の理解を深める。
- 8) 朗唱を通じてリズムや響きを感じ取る。

今後、現代の子どもたちにとってなじみのない漢詩、漢文、就中日本漢詩をどのように近づけるのか、またその学習を意義あるものにするにはどのようにすればよいのか、さらなる考察が必要であろう。

4. おわりに

この国の言語生活にとって、漢字・漢語・漢文はどのような存在であろうか。生徒にとって漢字かなまじり文は空気のようなものであろうか、そうでないこと

3. 教科書所収の日本漢詩(戦後)

		1951	1954	1957	1960	1963	1967	1970	1973	1976	1982	1986	1990	1993	1996	2000	2003
		1953	1956	1959	1962	1965	1969	1972	1975	1981	1985	1989	1992	1995	1999	2002	2005
1	赤松蘭室	平清盛喜															
2	阿部仲麻呂	窃命使本園															
3	安倍広海	秋日於長王宅、宴新羅客															
4	新井白石(君美)	自題肖像															
5	空蟻東野	迷人之筑後															
6	石川丈山(童之)	題石不動壁															
7	石川丈山(童之)	富士山															
8	石川丈山(童之)	幽居即事															
9	石川丈山(童之)	驟雨															
10	市河克資(世寧)	題赤壁四															
11	伊藤東涯(長胤)	通藤樹香院															
12	伊藤東涯(長胤)	田園雜興															
13	上杉謙信(輝虎)	九月十三日夜															
14	有智子内親王	雜言奉和「漁歌」二首															
15	有智子内親王	春日山莊															
16	大窪詩仏(行)	立秋															
17	大皇中齋(平八郎)	四十七士															
18	大田錦城	秋江															
19	大畑錦溪(清宗)	題太田遺澤信慶園															
20	大津皇子	述志															
21	大津皇子	感統															
22	大神阿臣高市麻呂	從駕応詔															
23	秋生信保(双松)	送菅崎嶽															
24	賀陽島年	高士吟															
25	河島皇子	山齋一絶															
26	菅茶山(晋帥)	宿生田															
27	菅茶山(晋帥)	先妣十七回忌祭涙余賦此															
28	菅茶山(晋帥)	冬夜読書															
29	菅茶山(晋帥)	富士回															
30	菅茶山(晋帥)	秋夜夢廻孫															
31	義堂周信	雨中對花															
32	木戸孝允	風成															
33	木戸孝允	夜坐思亡友															
34	紀徳民(細井平洲)	夢鏡															
35	紀長谷雄	落花狀															
36	紀吉麻呂	秋宴得声・清・蒸・韻四字															
37	基陽風川	山行示同志															
38	西御南州(隆盛)	風成(桃羅辛融志始璧)															
39	西御南州(隆盛)	風成(才子元來多過事)															
40	齊藤盛	嚴島															
41	坂井虎山(兼)	壳花翁															
42	嵯峨天皇	江頭春研															
43	嵯峨天皇	山寺鐘															
44	嵯峨天皇	山夜															
45	坂上今継	詠史															
46	坂上今継	涉信濃坂															
47	佐原盛統	白虎隊															
48	藤谷空陰(世弘)	送空弁仲平東游序															
49	藤崎小竹	嵐山雨景															
50	柴野栗山(柳彦)	詠富士山															
51	柴野栗山(柳彦)	月夜赤松垣外															
52	柴野栗山(柳彦)	蓮字喻															
53	柴野栗山(柳彦)	題寫院示塾生															
54	坂南山(管城)	松島															
55	坂井正	在唐憶本御															
56	坂月性	將東遊題壁															
57	坂月性	題壁															
58	春屋妙鑑	靈門寺偶作															
59	淳和天皇	桂美州推薦吉野															
60	菅原道真	九月十日															
61	菅原道真	九日後朝、同服秋思、斥制															
62	菅原道真	月夜見梅花															
63	菅原道真	見渤海親大使真園有感															
64	菅原道真	曾沐															
65	菅原道真	重陽後一日															
66	菅原道真	院家書															
67	菅原道真	不出門															
68	菅原道真	聞雁															
69	杉浦重剛	自訟															
70	錦木虎雄	水閣醉															
71	絶海中津	斥制賦三山															
72	絶海中津(沢絶海)	山家															
73	絶海中津	多景樓															
74	絶海中津	東宮秋月															

		1951	1954	1957	1960	1963	1967	1970	1973	1976	1982	1986	1990	1993	1996	2000	2003
		1953	1956	1959	1962	1965	1969	1972	1975	1981	1985	1989	1992	1995	1999	2002	2005
75	厨島翁(種臣)				●												
76	高野船客(惟馨)	●	●	●			●										
77	續在列						●	●									
78	田舎村竹田		●														
79	民衆人	●	●	●	●												
80	中蔵内月			●	●												
81	中蔵内月			●	●												
82	遠山雲如		●	●	●		●										
83	徳川寄唱		●	●	●												
84	永井簡風					●	●	●									
85	夏目漱石(金之助)					●	●	●									
86	夏目漱石(金之助)		●														
87	夏目漱石(金之助)														●	●	
88	夏目漱石(金之助)					●	●	●		●							
89	夏目漱石(金之助)					●	●	●		●				●	●	●	
90	夏目漱石(金之助)					●	●	●		●				●	●	●	
91	夏目漱石(金之助)					●	●	●		●				●	●	●	
92	夏目漱石(金之助)					●	●	●		●				●	●	●	
93	夏目漱石(金之助)					●	●	●		●				●	●	●	
94	夏目漱石(金之助)		●														
95	夏目漱石(金之助)							●	●								
96	夏目漱石(金之助)										●		●				
97	夏目漱石(金之助)					●	●	●									
98	成島柳北(弘)					●	●	●									
99	成島柳北(弘)		●														
100	乃木希典			●	●	●	●	●									
101	服部南郭(元喬)		●	●	●	●	●	●									
102	尾鷲二洲(孝望)					●	●	●									
103	広瀬旭莊(謙)		●														
104	広瀬旭莊(謙)																
105	広瀬淡窓(建)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
106	藤井竹外(啓)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
107	藤井竹外(啓)		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
108	藤田東湖(彪)				●									●	●	●	
109	藤原宇合	●															
110	藤原公任																
111	藤原為時			●													
112	藤原史	●	●														
113	藤原冬嗣						●										
114	正岡子規																
115	松永尺五				●												
116	源云明								●	●							
117	三宅観潮	●	●														
118	森鷗外(林次郎)		●														
119	森鷗外(林次郎)																
120	森春涛(春直)		●														
121	森田節吉(益)					●											
122	文鏡天皇	●	●	●	●	●											
123	染川紅華	●															
124	柳川三岩		●														
125	染川星麿(孟徳)			●													
126	染川星麿(孟徳)			●													
127	染川星麿(孟徳)			●													
128	染川星麿(孟徳)			●	●		●										
129	染川星麿(孟徳)			●	●		●										
130	染川星麿(孟徳)		●	●	●												
131	染田観麿																
132	山崎蘭斎(高)			●													
133	山崎蘭斎(高)	●	●	●	●												
134	山田三方					●	●	●		●							
135	友権(雷村)			●													
136	鹿沼保胤						●	●									
137	吉田松陰(矩方)		●		●	●	●	●									
138	種惟委			●													
139	頼山陽(襄)			●	●	●		●									
140	頼山陽(襄)			●	●	●		●									
141	頼山陽(襄)		●	●	●	●		●									
142	頼山陽(襄)	●	●	●	●												
143	頼山陽(襄)			●		●	●	●									
144	頼山陽(襄)																
145	頼山陽(襄)	●	●			●	●	●		●				●	●	●	
146	頼山陽(襄)					●	●	●		●				●	●	●	
147	頼山陽(襄)																
148	頼山陽(襄)	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●
149	種玄雄(復)				●												
150	六如																●

●は、当該年度の教科書に1冊でも掲載されたことを示している。
詩題は、教科書によって異なる場合も同一詩の場合には統一して示した。
ここに挙げたのは、必ずしも発行された全ての教科書にあたって確認したものではない。

は「国語」の歴史を一瞥するだけですぐわかる。漢字（とかな）による表記はたんなる文字表記の枠を超えて、言語がどのような姿で表象されるべきかという言語の規範的問題に直結しているのである。そして、それは国家の根幹、日本人のアイデンティティにも関わる問題なのである。

このことは、近代日本の漢字廃止論の嚆矢となった前島密が十五代将軍徳川慶喜へ上申した「漢字御廃止之議」にも見られる。

「国家の大本は国民の教育にして其教育は士民を論せず国民に普からしめ之を普からしめんには成る可く簡易なる文字文章を用ひざる可らず 其深遠高尚なる百家の学に於けるも文字を知り得て後に其事を知る如き艱澁迂遠なる教授法を取らず渾て学とは其事理を解知するに在りとせざる可らずと奉存候

果して然らば御国に於ても西洋諸国の如く音符字（仮名字）を用ひて教育を布かれ漢字は用ひられず終には日常公私の文に漢字の用を御廃止相成候様にと奉存候」

ここで前島は教育が国家の根幹であり、西洋に追いつくための近代的知識の獲得には漢字が不向きであり、廃止してしまえと述べている。この考えの底には中国文明からの離脱の意志がある。

「支那は人民多く土地広き一帝国なるに比萎靡不振の在様に沈倫し其人民は野蛮未開の俗に落ち西洋諸国の侮蔑する所となりたるは其象形文字に毒せらるゝと普通教育の法を知らざるに坐するなり。」

漢字廃止論の原形はこの二点にある。即ち、漢字は非合理的なものであるということと、脱中国、視点を変えれば日本（人）とは何かということである。しかし、それらは近代に始まったことではなく、前近代にあってもしばしば取り上げられている。たとえば本居宣長が『古事記』注釈にめどがついた時点で語った「そはまづからごゝろを清くはなれて、古のまことの意をたづねえずばあるべからず。」（『玉勝間』）には、漢意を排除することが、古のまことのところをとらえることにつながるとする認識がある。宣長は思想は言葉であることを、強く認識していたのである。

と同時に、日本人の思考・言語を深化させたのが漢字・漢文との邂逅による葛藤であったのもまちがいはない。とすれば、漢詩・漢文を自らの表現方法として選んだ者は、意識的にこの対象と格闘した存在であろう。

現代がIT社会と呼ばれるようになってから久し

い。ITに漢字は適応できないと論じられた時期もあったが、漢字はその危惧を乗り越えてしまった。気がついてみれば漢字文化圏はヨーロッパの人口をしのいだ。如上の視点も取り入れながら、日本人が作った漢詩・漢文をたんに古典の枠に閉じこめるのではなく、開かれた可能性をもった言語の営みとしてとらえていきたい。次年度からは、具体的に作品を取り上げ、教材化への道筋を示したい。

参考文献

『精選漢文読本巻一 学習指導書』

塩谷 温 他 開隆堂 昭和28年6月

『新しい漢文第三学年用教授用参考資料』

斯波六郎 他 三省堂 昭和30年3月

『精選漢文読本巻三 教授用参考資料』

塩谷 温 他 開隆堂 昭和34年6月

『高等新漢文一教授用資料』

柳町達也 他 三省堂 昭和35年3月

『漢文指導資料古典乙Ⅰ』

内田泉之助 他 明治書院 昭和38年3月

『漢文精選学習指導書』

塩谷 温 他 開隆堂 昭和38年3月

『高等学校古典総合二指導参考書』

武田祐吉 他 角川書店 昭和39年4月

『新制高等漢文上・下乙Ⅰ改訂版教授用資料』

諸橋轍次 他 大修館書店 昭和41年6月

『改訂漢文古典乙Ⅰ指導資料』

内田泉之助 他 明治書院 昭和41年5月

『新制高等漢文乙Ⅱ改訂版教授用資料』

諸橋轍次 他 大修館書店 昭和42年6月

『漢文古典乙Ⅰ三訂版指導資料』

内田泉之助 他 明治書院 昭和44年5月

『高等学校漢文選改訂版指導資料』

諸橋轍次 他 大修館書店 昭和62年4月

『国語Ⅰ教授資料漢文編』

井口時男 他 教育出版 1994年3月

『国語Ⅱ教授資料漢文編』

井出雅子 他 教育出版 1995年3月

『高等学校古典一漢文編指導と研究』

森野繁夫 他 第一学習社 1995年3月

『高等学校国語Ⅱ指導資料』

星野志朗 他 三省堂 1999年3月

『高等学校古典漢文編指導と研究』

森野繁夫 他 第一学習社 2004年3月

この他、教科書関係出版各社より、メール等でいただいた資料を参考にしました。